

[別紙 2]

審査の結果の要旨

氏 名 笹 原 朋 代

本研究では、東京都内の大学病院で活動する緩和ケアチームを対象とし、緩和ケアチームの具体的支援内容を明らかにするとともに、その支援を支援状況、患者の心身状態および病棟看護師の認識の3つの側面から評価したものであり、以下の知見を得ている。

1. 緩和ケアチームの支援内容は、【症状緩和】【患者の精神的サポート】【治療目標の明確化】【療養場所の選択・移行のサポート】【家族ケア】【看取りが近い患者についてのサポート】【病棟スタッフへの教育・サポート】と、これらの支援をするうえでの基盤としての【緩和ケアチームがよりよく機能するための基盤作り】の8つに整理された。
2. 依頼内容として、8割以上で疼痛マネジメントが挙げられ、その他の理由は2割以下であった。一方、提供したケア内容は、疼痛マネジメントが9割以上と最も多いのは変わらなかったが、4割以上に患者の精神的サポート、2割以上に疼痛以外の身体症状マネジメント、家族の精神的サポート、家族への病名・病状説明、在宅療養移行のための調整がなされていた。
3. 緩和ケアチーム依頼時の患者は、疼痛、倦怠感、食欲不振、不安が強かった。
4. 緩和ケアチームに依頼されてから1週後の患者について、EORTC QLQ-C30では不眠が改善し、便秘が悪化していた。また、STAS-Jでは「痛み以外の症状」が悪化していた。
5. 本研究で示した支援内容を提供するコンサルテーション型の緩和ケアチームは、病棟看護師から高い評価を得ていた。

6. 緩和ケアチームは、症状緩和だけでなく療養場所の選択・移行や医療者への教育・サポートなど多面的な支援を行っていたことから、今後は他の側面についても評価していくことが課題である。

以上、本論文では、大学病院で活動する緩和ケアチームが提供する具体的支援内容を明らかにし、その支援を多面的に評価した。わが国において、がん医療の一環として緩和ケア提供体制の整備が重要課題となっている中、先駆的な緩和ケアチームの具体的支援内容を明らかにし、その支援を評価したことは、緩和ケア提供体制を量的・質的に充実させる上で重要な貢献をなすものと考えられ、学位の授与に値するものと考えられる。